

エジプトとの出会い

竹野内 恵太

「エジプト」と聞くと、まず想起するのも、現代のエジプト社会というよりも、長大なナイル川と広大な砂漠、過去において彩られた荘厳な古代文明であると思う。実際、エジプトに対する私のイメージも、これに近いものであった。

私は、幼小の頃からエジプトの考古学に関心があった。メディアや日本語の著作に触れ、エジプトの考古学を志す思いを月日と共に膨らませていった。考古学を学ぶため東海大学に入学し、山花京子先生の指導の下で教えを乞い、エジプトの考古学にさらに魅了されていったことは、今でも鮮明に思い出す。しかし、机上で学ぶ一方で、学部生時代は発掘調査といった実際のフィールドをエジプトで経験することはなかったが、日本の発掘調査に参加することで、考古学それ自体に対する興味を深めて

いった。

そんな折り、四年次に卒業論文執筆のための資料調査として、イギリスのロンドンやマンチェスター、エジプトに訪れる機会があった。ロンドンやマンチェスターでは、大英博物館やピトリー博物館、マンチェスター博物館、大英図書館で、国内では実見することのできない資料や文献にアクセスした。また、当時山花先生のアポイントメントもあり、元マンチェスター大学教授のデニス・ストックス先生とお話をさせていたたく機会を得ることができた。雲の上のような海外の研究者が、より身近な存在であることを体感するとともに、さらにエジプト考古学を学びたいという気持ちも高まっていった。

こうして大学院修士課程で、早稲田大学の門を叩くことになった。現在もエジプトの考古学を未熟ながら学び続けているが、私の専門としている時代は、ピラミッドやツタンカーメンの黄金のマスクで知られているような壮麗な文明の痕跡ではなく、そ

れらが形作られる以前、いわば古代エジプト文明が成立する以前の時代を研究対象としている。

先王朝時代と呼ばれる時代は、紀元前四千〜三千年頃で、その名の通り、王朝時代に先行する時期であり、その起源とも言える。古代エジプト文明の起源とはどのようなもので、いかなる過程を経て辿り着いたのか。この疑問に一筋の光を当てるべく、研究を続けている。私が研究対象としている遺物は、石製品である。ナイル川下流域や東西の砂漠からは、豊富に岩石が産出し、古代エジプトを通じて墓や神殿、彫像などに、先王朝時代では、容器や装身具などに頻繁に利用される。王朝時代には、国家事業として、遠隔地にある石材資源の獲得のための遠征を行っていた。国家として統一されていない先王朝時代では、こうした資源を巡って各地域が競争関係にあったことも想定されている。現代社会でも、稀少な資源の獲得のために各国が経済的な競争状態にある。限りある資源へのアクセス

権を握ることは、自国の存亡を左右するものであり、古代においても現代においても看過できない問題であったことが窺われる。

また、石製品は、硬質な岩石から作られるため、その加工には多大な労働力を必要とする。過去の人々がどのような思考と技術を以って石製品を製作したかについて考えることも、重要なテーマとなる。現在、実際に石製品を自ら製作実験をすることで、自分と過去の人々の間にある距離を縮める努力もしている。

現在調査している遺跡は、ルクソール西岸・アルIIコーカ地区に位置する新王国時代のウセルハト墓と、カイロから南に位置する、同じく新王国時代のダハシユール北遺跡である。現場では、作業員として雇っている多くのエジプト人と調査をともにし、時には指示を出し、時には笑いの中で作業を進めている。エジプト人は非常に明るく、気持ちのいい気質である。単調になりがちな調査でも楽しいものにしてくれ

る。言葉の壁からコミュニケーションがうまくできず、考えや感情が伝わらないものかしさもあるが、現地の人たちと協力して調査を進めることに喜びを感じ、過去を知る調査の中で、人との関わり合いの大切さを学ぶことができる。外国の考古学を学ぶ上で、異国の文化習慣や社会規範を理解し、現地の言葉でコミュニケーションをとることは不可欠である。外国人が土足で他国に上がって胡坐をかくような行為はしてはいけない。

しかし、一方でエジプトの政情は革命以降、不安定であり、悪化の一途を辿っている。調査自体の中止だけでなく、宿舎から外出することもままならない場合も往々にしてある。調査を継続するにあたり、こうした政治問題は自分とは無関係でなく、他人事ではない。エジプトの考古学を学ぶ以前までは、エジプトに対して過去において彩られた痕跡にばかり関心が偏っていたが、そうした痕跡を深く学ぶと現代社会とは切り離せないものがある。過去を発掘す

る行為が現代で行われていることを私たちは忘れてはいけない。遠い異国であるが、今では常にかかるとなっている。

時には机の上で膨大なデータと睨み合い、緻密に資料を観察し、時にはフィールドで土まみれになって発掘をする。遠い異国へ赴いて、四苦八苦しながらも現地の人々と調査を共にする。大学に入学して以来、今まで考古学に携わってきたと思うことは、こうした日々の活動にある「楽しさ」である。そこにある「楽しさ」ゆえに、今まで考古学を続けることができた。そしてこれからもその「楽しさ」は続いていくように思う。